

## 第59回舞踊学会（岡山大会）

### 「からだ・トポスとの対話」

2007年12月1—2日（倉敷市）

#### 大会概要

瀬戸内のおだやかな風土と高梁川がもたらした豊かな大地に恵まれ、日本文化の味わいが残る美しい街、倉敷。第59回舞踊学会大会は、われわれの感性を刺激し、癒す空間（トポス）で開催され、参加学会員は、大原美術館、倉敷考古館、倉敷民芸館などが立ち並ぶ倉敷美観地区を散策、川面に映る白壁と貼り瓦の風情を堪能した。

大会初日（12月1日）は午後から開催。全国各地から足を運んでくださった会員・一般会員が多数参加する中、第1会場、第2会場において10演題の研究発表（倉敷芸文館）でスタート。幼児から成人までに至る実践研究及び文化事象を捉えた研究発表と質疑応答が行われた。

夜の帳が降りる頃、白石島からお越し頂いた重要無形文化財「白石踊り」の実演鑑賞。その後、寒さに震え始めたからだが汗するほどの「白石踊り」体験。薦のからまるアイビスクエアにも映える重要無形文化財の踊りに、心身ともに酔いしれるひとときであった。終演後は交流広場（倉敷アイビスクエアホテル宴会場）。大会参加者が互いに語りあう楽しい宴となった。最後には地元ダンス愛好者によるダンスパフォーマンスが中庭で展開され、さらにエキサイティングな夜は続いた。

大会2日目の午前中は、日本のバレエ史、舞踏、舞踊人類学など、6演題の研究発表とクリス・ウゴロ氏（ナイジェリア・ベニン大学）の委嘱研究発表が行われた（倉敷芸文館）。午後は、大会の棹尾を飾るシンポジウム「からだ・トポスとの対話」がゲスト講師を交えて開催され、終了後、名残を惜しんでの閉会となった。

#### 「トポス」白石踊り企画の経緯

担当理事 岡本 悦子

第45回舞踊学会（平成5年岡山開催）では、深夜発祥の地成羽町（現高梁市）にて、備中神楽をご堪能いただいた。14年後2回目にあたる岡山大大会では、学生時代、松本千代栄先生に「男踊り・女踊り・娘踊り・奴踊り・傘踊りなど人間社会の仕組みを映した老若男女の輪踊りは、輪廻転生の思想をも反映している」と熱く教えをうけた白石踊りを会員の皆様とともに堪能したいと考えた。さらに、地域の伝統に地元の人間が触れているとは限らない現状から、学会企画を会員以外の地域にも開いて、誇りを持って自伝統を再発見し、踊りの輪で人がつながる機会になればとも考えた。

問題は多々生じた。夏の盆踊りをこの冬の季節にかの衣装を身につけ屋外で踊っていただくこと、草履で踊る振りを砂浜でなく、洋風煉瓦上で再現していただく価値を問い直す日々が続いた。



やがて、核となるシンポジウム企画に地元美術館でのダンスws報告をセットするアイデアから発して、テーマ「からだ・トポスとの対話」が浮上してきたとき、倉敷の街全体を会場とした巻き込み型企画として方向を定めた。「柔らかい発想と実験の価値」を片岡担当理事が理論武装して後押しして下さり、心を強くした。白石踊り会との連携については、10数年にわたって、現場と信頼を築き、細やかに配慮できる本羽実行委員の尽力あって上記の異質な場への垣根を低くしてもらえたと感謝している。（なお、「白石踊り保存会」と命名しない理由の一つは、伝統の継承に留まらず、今を生きて踊る「白石踊り会」でありたいとの心意気の表明であるという。）

白石踊りは盆に砂浜で踊られるだけでなく、初盆を迎えたお宅の門前に出かけて踊る風習が今も残っているという。死者を弔って踊られてきたこの踊りは、物理的条件としての「トポス」を選ぶのではなく、今を生きる人の気持ちをくんだ「トポス」に応じて踊られているのだと改めて胸を熱くしている。

#### 白石踊りとのつながりと現状

実行委員 本羽 恵子

35年前の夏、大学の宿題『郷土の民俗舞踊のレポート』のために初めて島を訪れた。蒸し暑い盆の夜、海に隣接する公民館前の広場で踊りの輪が作られた。その祭りの最中に汐が満ちてきて、足元が濡れてきても平気で深夜まで踊っていた不思議と、民宿の床が湿った砂でざらざらしていた感触はよく覚えているが、肝心の踊りの事はあまり覚えていない。その後、縁あって日本民俗舞踊研究会に入り、須藤先生の下で民俗舞踊の美しいムーブメントに魅了された私は、岡山に帰郷して

から白石島に通うようになり、15年前からは学生達を率いて白石踊りに参加するのが毎年の行事になった。白石島は笠岡港から南12キロ、船で40分ほどの離島で、夕方5時の船便が最終になるため、かつては泊りがけの旅であった。雨が降れば踊りは中止でガッカリした年や、踊りが習いたいとお願いしても「また来年来いや～」と言われたり、エピソードはたくさんある。



平成11年に『島の盆ツアー』という日帰り白石踊り体験ツアーが企画された。これは8月14日の夕方笠岡港をチャーター船が約200名の観光客を乗せて島へ行き3時間ほど白石踊りを楽しんでもらってまた帰る、というツアー。島では屋台を準備したり、踊りのレッスンや子供と大人の踊り(衣装付)の鑑賞など至れり尽くせりの歓迎をしてくれた。主催は『白石踊り会』で、この動きは島の住民の高齢化や離島する若者、少子化による人口の減少で、踊りの伝承の危機感が強くなり対応策が模索され、島の活性化が急務になったためという。20年前とは雲泥の差の対応である。しかしこれも3年前に見直され、今は7月第3週の土曜日に島の浜辺で、規模も縮小されて行われるようになった。これは、お盆には個々の家にも来客があり、ツアーの世話の負担が大きくなった事や、本来伝承されてきた盆踊りの形に戻そうという島民の意向によると聞いた。現在の衣装は1955年に作成されており、またこれが魅力なのだが、昔は自由奔放に男が女装したり、仮装したりして楽しく踊っていたそうだ。今の盆には、浴衣や洋装の普段着など思い思いの格好をして踊り、衣装は着ない。島の人達は多くの観客と一緒に踊りを楽しみ踊ってくれ、一緒に祭りを創り上げていくことを望んでいるようだ。白石踊り会はこのツアーの直前に、2回笠岡市で『出前講座』を毎年無料でして下さるが、友人や学生達と例年参加する中で、島の皆様に覚えていただき、今がある。感謝と島を想う気持ちは強い。苦節? 10年というべきであろうか。焦っては这个世界は語れない。

白石踊り会の活動は①県内外のステージ、②夏、

ツアーも含めて観光客のために踊る、③年中行事としての盆の供養踊り、④島の子供達への伝承教育に分類される。小中学校ではほぼ毎月合同で踊りの練習が行われている。白石踊り会の指導部の方々を中心に、男踊り、奴踊り、月見踊り、扇子踊り、音頭、太鼓とグループに分けて高学年者に責任を持たせる形をとっている。学校側の協力も素晴らしく、平成9・10年度には文部省の伝統文化教育推進事業にも指定された。島の子供達は踊りを通じて、伝承の意義を知り島の文化の誇りを持って、思いやりのある、豊かな心を育てているようだ。

このたび舞踊学会で貴重な場を与えていただき、多くの舞踊教育に携わる先生方に白石踊りの輪の中に入れていただくなど、夢のようなひと時であった。今回のテーマ『からだとトポス』の集約した世界が民俗舞踊の中にはある。生と死・呼吸・天と地・人と人・自然と人・神と人・そして人の中の神と人・民俗の営みは素晴らしい! 学生時代のレポートで縁した世界がお役に立ち、改めて感謝すると共に、教育の大切さを実感している。

#### 大会を終えて

第59回舞踊学会大会が倉敷市での開催と決まったのは、大会前年の3月末。学会大会は東京都内と地方の隔年開催という原則になっているが、地方での開催は困難点も多く、引き受け先もなかなか見つからない状況にある。そのような中、倉敷での開催を望む声が高まり、就実大学の岡本悦子先生に打診したところ快諾され、岡山大会倉敷市での開催が実現した。しかし、岡山県には舞踊学会員が少なく、大会実行委員6名中3名はこのために学会に新規入会して下さり、現職の業務で多忙な日々を送りながらも大会開催に熱い思いとエネルギーを注いで下さった。東京(片岡)と京都(遠藤)と岡山(岡本)が頻繁にメール交換をして空間距離を克服、そして岡山の地では、実行委員の皆様が縁の下の力持ちとなって準備に奔走して下さって開催できた岡山大会であった。

舞踊学会が、このような熱い思いで大会開催をしてくださった新会員の皆様に応える学会として発展を続けることを願い、報告とする。

(文責 片岡康子)

最後に、実行委員会より、ご参加・ご発表下さいました学会員の皆さま及びご後援・ご協力賜りました関係各位に、心より御礼を申し上げます。

<第59回舞踊学会大会実行委員会>

担当理事	片岡康子	遠藤保子	岡本悦子
実行委員	太田一枝	新山順子	本羽恵子
	青山敦子	筒井愛知	道満智子